

舞姫

與謝野晶子

青空文庫

西の京三本樹のお愛様に

このひと巻をまるらせ候

あ き

うたたねの夢路に人の逢ひにこし蓮歩れんぽのあとを思ふ雨かな

美しくをなごしき女をなごぬすまむ変化へんげもの来こよとばかりにさうぞきにけり

家七室霧ななまにみなかす初はつあき秋を山の素湯さゆめで来こしやまろうど

恋はるとやすまじきものの物懲ものごりにみだれはててし髪にやはあらぬ

船酔ふなまひはいとわかやかにまろねしぬ旅あきうどと我とのなかに

白百合しろゆりのしろき畑のうへわたる青鷺あをさぎづれのをかしき夕ゆふべ

わかき日のやむごとなきは王城わうじやうのごとしと知りぬ流離りゅうりの国に

歌を見てうつぼ柱に秋雨のつたふやうなる涙の落ちぬ

日輪に礼^{らい}拜^{はい}したる獅子王の威とぞたたへむうらわかき君

みさぶらひ御髪^{みぐし}に似るは乱菊^{らんぎく}と申すと云ひぬ寝^ねてのみあれば

かざしたる牡丹火^{ぼたん}となり海燃えぬ思ひみだるる人の子の夢

われと燃え情火環^{たまき}に身を捲^まきぬ心はいづら行方^{ゆくへ}知らずも

山々に赤丹^{あかに}ぬるなる曙^{あけぼの}の童^{わらは}が撫^なでし頬^ほと染まりける

花^{はな}草^{ぐさ}の満地^{まんち}に白とむらさきの陣立^{ちん}立ててこし秋の風かな

灯ひに遠とほきうすいろぞめのあえかさの落花らかに似にるを怨うら女にょと云ふや

初はつ夏なつの玉たまの洞ほら出でしほととぎす啼なきぬ湖上うみのあかつきびとに

朝あさに夜よに白檀はくたんかをるわが息いきを吸すひたまふゆゑうつくしき君きみ

木蓮もくれんの落花らかひろひてみほとけの指ゆびとおもひぬ十二じふにの智円ちゑん

罪つみしたまへめしひと知しると今日けふを書かき明日あすは知しらずと日記にきする人ひと
を

春雨やわがおち髪を巢にあみてそだちし雛ひなの鶯なの啼なく

二もとの檝かんらん攪らんしげる琅ろうかん※の亭の四方を船かよひけり

春の山懸樋かけひの水のとまりしを昨夜よべの狐とにくみたまひぬ

遠つあふみ大河たいがながるる国なかば菜の花さきぬ富士をあなたに

軒ちかき御座みざよ火ほの気けと月光のなかにいざよふ夜の黒髪

松かげの藤ちる雨に山越えて 夏花なつばなづかひ使野はを馳はすらむか

廻廊を西へならびぬ騎者たちの三十人は赤丹あかにの頬ほして

きぬぎぬや雪の傘する舞ごろもうしろで見よと橋こえてきぬ

高き家やに君とのぼれば春の国河遠とほじろ白し朝の鐘なる

長雨や出水でみづの国の人なかば集つどへる山に法華経ほけきやうよみぬ

夕ゆふべにはちるべき花と見て過ぎぬ親もたぬ子の薄道うすだうしん心に

淡色うすいろの牡丹今日ちる時とせず厄日やくびと泣きぬ病やみ僻ひがむ人

保津川ほづがはの水に浴ふなる女松山めまつやま幹むらさきに東明しののめするも

萌野もえのゆき紫野ゆく行人かうじんに霰あられふるなりきさらぎの春

二十六きのふを明日とよびかへむ願ひはあれど今日も琴ひく

髮香かうたき錦に爪をつつませておふしたてられ君にとつぎぬ

わが宿の春はあけぼの紫の糸のやうなるをちかたの川

ゆるしたまへ二人を恋ふと君泣くや聖母にあらぬおのれの前に

春いにて夏きにけりと手ふるれば玉はしるなり二十五の絃いと

すぐれて恋ひすぐれて君をうとまむともとよう人の云ひしならね
ど

ふるさとの潮の遠音とほねのわが胸にひびくをおぼゆ初夏の雲

天とぶにやぶれて何の羽かある夢みであれな病める隼^{はやぶさ}

大夏^{おほなつ}の近江^{あふみ}の国や三井寺^{みゐでら}を湖^{うみ}へはこぶと八月雲す

われを見れば焰^{ほのほ}の少女^{をとめ}君みれば君も火なりと涙ながしぬ

梅雨晴^{つゆばれ}の日はわか枝^えこえきらきらとおん髪をこそ青う照りたれ

鶯^ゑの餌^えがひすがたやおもはれし妻は春さく花はやしける

ものいはぬつれなきかたのおん耳^きを啄木鳥^{つつきは}食めとのろふ秋の日

おほぎそ
大木曾は霧や降るらむはゆま路を駄馬だうまひく子とつれだち給へ

岡の家瑠璃るりすむ秋の空の声たてゝ幾ひら桐おちにけり

ほととぎす山の法師が大音たいおんの初夜の陀羅尼だらにのこだまする寺

紫と黄いろと白と土橋つちばしを小蝶ならびてわたりこしかな

二とせや緞子どんす張りたる高椅子のうへに坐みるまで児こは丈のびぬ

まるやま
 円山の南の裾の竹原にうぐひす住めり御寺みでらに聞けば

たたかひは見じと目とづる白塔はくたふに西日しぐれぬ人死ぬ夕ゆふべ

をち
 遠かたに星のながれし道と見し川のみぎはに出でにけるかな

物思へばものみな慵ものう転寝うたたねに玉の螺鈿らでんの枕をするも

壁張や花紋のなかにそちむきの黒髪うつる春の夜の家

春の宵壬生みぶ狂言の役者かとはやせど人はものいはぬかな

比叡ひえの嶺ねにうす雪すると粥かゆくれぬ錦織るなるうつくしき人

おとうとはをかしおどけしあかき頬ほに涙ながして笛ならふさま

沙羅さら双樹さうじゆしろき花ちる夕風に人の子おもふ凡下ほんげのこゝろ

北海まいの鱒積ますみきたる白き帆を鐘楼しゆろうに上り見のほてある少女をとめ

五月さつき雨あめ春が墮おちたる幽暗の世界のさまに降りつづきけり

春の夜や聖母聖なり人の子の凡慮知らじと盗みに来しや

野のやしろ社はんや榛はんの木折れて晩秋の来しと銀杏いてふの葉に吹かれ居る

君にをしふなわすれ草の種まきに来よと云ひなばおどろきて来む

京しゆの衆しゆに初音しゆまゐると家ごごとにうぐひす飼をたぎひぬ愛宕こほりの郡

知恩院ちおゐんの鐘かねが覚さまさぬ人ひとさめぬ扇あふぎもとむるわが衣きぬずれに

あやまちは君を牡丹とのみいほで花に似し子をかぞへけるかな

君は死にき旅にやりきとまろ寝しぬうしろの人よものないひそね

初夏のわか葉のかげによき香する煙草たばこをのむをよろこぶ人と

春そよと風ふく朝はおん墓に桜ちらむとなつかしき父

おもはぬを罪と知る日の君おもひ涙ながれてはてなき日なり

わが知らぬわれ恋ふる子のおもひ寝の来しとゆかしむ琴ききし夢

なるたき
鳴 滝や庭なめらかに椿ちる伯母の御寺のうぐひすのこゑ

みなつき
六月のおなじ夕に簾しぬ娘かしづく絹屋と木屋と

おほるがは
大堰川山は雄松の紺青とうすき楓のありあけ月夜

思ひたまへ御胸の島に糧足らずされど往なれぬながされびとを

君が家につづく河原のなでしこにうす月さして夕となりぬ

夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり

香盤かうばんに白檀そへて五月雨さみだれの晴間を告げぬさもらひびとは

君まさぬ端居はしゐやあまり数おほき星に夜寒をおぼえけるかな

朝ぼらけ羽はごろも白しろの天あめの子が乱舞するなり八重桜ちる

春の海いま遠をちかたの波かげにむつがたりする鰐わに鮫ざめおもふ

もゝ色の靄もやあたたかく捲く中にちさき花なる我かのこゝち

誰れが子を殯もがりにおくる 銅拍子どびやうしぞ秋の日あびて 一列白き

梅の花たき火によばれしら髪をかきたれ来なる隣の君よ

白き羽はの幾鳥とべば山頂の雲いざよひぬ秋の湖

仁和寺にんなぢの門もん跡観ぜきます花の日と法師幕うつ山ぎくらかな

元日ちやうあんや 長安ちやうあんに似る大道に遣羽子やりはごしたる袖そでとらへけり

羽子板に似たりといはばおこられむやりはごすとて棲つまとる人を

ほととぎす水ゆく欄にわれすゑてももの涼しき色めづる君

うらさびしわが家のあとに家つくと青埴盛るを見たるここに
に

磯草にこほろぎ啼くや夕月の干潟あゆみぬ人五六人

紫野なでしこ折ると傘たたみ三騎の人に顔見られけり

夏まつりよき帯むすび舞姫に似しやを思ふ日のうれしさよ

君を見て昨日きのふに似たる恋しさをおぼえさせずば神のろよ詛はむ

このつかのま悲みの日に伝ふべき甘さと慄ふるへ美しくと笑ゑみ

髪ながきおんかげ溪たにを深う落ち流に浮きぬしろがね色に

高野川河原のかなた松が枝えにかはせみ下おりぬ知る人の家

ふるき城は立てりしづかに山上のわか葉そよぎの薫くんずる雨に

うすいろを着よと申すや物もの焚たきしかをるころものうれしき夕

長月の御ぎよゑん苑の朝や露わぶと羅蓋らがいしてまし白菊の花

うたたねの御枕あまた候さくらふなりかひなも伽羅きやらの箱も鼓も

相さうにん人よ愛欲せちに面瘦おもやせて美しくしき子に善きことを言へ

牛つれて松たいまつ明したる山やまをとめ少女湖うみぞひゆけば家をしへける

春の月縁ゑんの揚戸あげどの重からば逢はで帰らむ歌うたへ君

あくどしや少し恋しとなす人をたゆ撓たゆまず寝いねず思ふと云ひぬ

日は暮れぬ海の上にはむらさきのあやめ菖蒲あやめに似たる夕雲のして

たなばたすだれや簾との外なる香かうろう炉ろうのけぶりのうへの天の河かな

妹いもが間は床のめなう瑪瑙めなうの水盤みづばんにべにばす咲きぬ七月しちにち七日

ただふたり海の岩草花しろき夜あけに乗りぬかつさ上総かつさの船に

摘みすてし野薔薇ながれぬ夕川の橋の柱にただよひつつも

公孫樹こうそんじゆ黄にして立つにふためきて野の霧くだる秋の夕暮

ほととぎす安房あはしもふさ下総の海上に七人ななたりききぬ少女をとめご子まじり

ゆゑしらずわが病むらしの時わかぬ脈うつ手とり死なむと云ふや

ちぬの浦いさな寄るなるをちかたはひねもす霞かすむ海恋しけれ

春の里舞ぎぬほさぬ雨の日の柳は白き馬をつながむ

君かへらぬこの家やひと夜に寺とせよ紅梅どもは根こじて放はれ

かきつばた白と紫くまなして流るる水に鯉の餌かはむ

粧けはひ室の鏡に浪なみのうつるなり海の風めで窓あけし家

かもめゐるわたつみ見ればいだかれて飛ぶ日をおもふさいはひ人
よ

ゆく春や葛かさい西の男はさみ鋏刀して躑つっじ躑を切りぬ居ゐ丈だけばかりに

おん舟に居こぞる人の袴はかまより赤き紅葉もみぢの島さして来ぬ

しよく
燭さして赤良小船あからをぶねの九つに散り葉のもみぢ積みこそ参れ

おほあかぎ
大赤城北上かみつ毛けの中なか空ぞらに聳そびやぐ肩を秋のかぜ吹く

春雨の山しづけさよ重なりて小牛まるぶも寝てあれと思ふ

秋の人銀杏いしてふちるやと岡に来て逢ひにける子と別れて帰る

うつら病む春くれがたやわが母は薬に琴を弾ひけよと云へど

やはらかにぬる夜ねぬ夜を雨しらず鶯まぜてそぼふる三日

夕顔やこよと祈りしみくるまをたそがれに見る夢ごこちかな

薬草の芽をふく伯父の草庵さうあんに琴ひく人を訪とへと思ふ日

ふたたびは寝釈迦ねじやかに似たるみかたちを釘する箱に見む日さへ無き

(父君の日に)

牡丹うゑ君まつ家と金字きんじして門かどに書きたる昼の夢かな

冬の日の疾風はやてするにも似て赤きさみだれ晴の海の夕雲

春の水船とに十たりのさくらびと鼓うつなり月のぼる時

夜よによきは炉ろにうつぶせるかたちぞとうきおん人のものさだめか
な

君が妻いとまたまはば京いに往いなむ袂たもとかへして舞はむと思へば

ほととぎす海に月てりしろがねのちひさき波に手洗ひをれば

夕ぐれの玉の小櫛をぐしのほそき齒に秋のこゑ立ておちにける髪

水みづ引ひきの赤あけ三尺の花ひきてやらじと云ひし朝露の路

冬川は千鳥ぞ来啼きなく三本木さんぼんぎべにいうぜんよぎの夜着ほす縁に

春の雨高野の山におん児ちごの得度とくどの日かや鐘おほく鳴る

うすものや六根ろくこんきよめまつらむとしら蓮風はすかぜす朝舟人に

しら樺の折木をれきを秋の雨うてば山どよみして鵲鳴くもかささぎ

春の潮遠音ひびきて奈古なこの海の富士赤らかに夜明けぬるかな

御胸にと心はおきぬ運命の何すと更に怖れぬきはに

梅ばい幸かうの姿に誰れがいきうつし人数にんずまばゆき春の灯の街

棧橋さんぼしや暮れては母のふところに入るとごとくに船かへりきぬ

玉ひかるべにさし指の美々びびしきにやらで別れし牧の花草

夕月夜さくらがなかのそよ風に天女さびたる御手みてとり走わしる

いづら行かむ君の案内あないに菜の花の二すぢ路の長しみじかし

舞ごろも五たり紅あけの草履ざうりして河原に出でぬ千鳥のなかに

百とせをかはらぬことは必らずと誓はぬ人を今日も見るかな

秋の路立たち楽がくすなる伶人れいじんの百歩にあると朝かぜを聴く

牡丹いひぬ近うはべらじ身じろぎにうごかばかしこ王冠の珠

わがこころ君を恋ふると高ゆくや親もちひさし道もちひさし

春の雨 衆しゆじやう 生なま すぐひの 大力者だいきしや ぬれていましぬさくらの中に

秋霧や林のおくのひとつ家にや啄木鳥きつつき 飼ふと人をしへけり

よう聞きぬ夢なる人の夢がたりするにも似たる御言葉なれど

君とわれあふひ葵に似たる水草の花のうへなる橋に涼みぬ

召されては宿直とのゐやつれの手もたゆく草書さうがきしたり暮れゆく春を

悪あくみやう名くわの果あり今日ある因縁の君を見し日は遠世とほよとなりぬ

来世とやすててこし日の母の泣く夢を見る子の何をののかむ

みづからは隙なく君を恋ふる間に老いてし髪と誇りも為すべき

すそ梳すけば髪あざやかに琴緒ことをしぬ絃いとの手知らば弾ひきに來よ風

人怨^ゑじて我ぞよりたる小柱に鬢香^{びんが}のこらむ其^{その}下に寝よ

冬はきぬ室^{むろ}に夢見む春夏秋ひつじとまじる草の寝ごころ

いとかすけく曳くは誰^たが子の羅^らの裾ぞ杜鵑^{とけん}まつなるうすくらがり
に

七つより袈裟^{けさ}かけならひ弓矢もて遊ばぬ人も軍^{いくさ}に死にぬ（その僧
の親達に）

籠こはなてば螢とまりぬ 香かう木ぼくのはしらにひとつ御み髪ぐしにひとつ

六月の氷まゐりぬ 深しん宮きうの白しろの珊瑚さんごのみまくらもとに

世に君の御み手てえて今は死なむとぞ昼夜感じ三とせの余よへぬ

春のかぜ加茂川こえてうたたねの簾すだれのなかに山吹ふき入れよ

五六人をなごばかりのはらからの馬車してかへる山ざくら花

森ゆけば靄もやのしづくに花さきしすみれ摘むとぞ名をのる子かな

紅^{べにがに}蟹^{かに}をさはな怖^おぢそねかくれたる前髪みゆれ砂山船に

磯松の幹のあひだに大海のいさり船見ゆ下^{しも}総^{づさ}の浦

紹の蚊帳の波の色する透^すきかげに松^ち千もとみる有明の月

月の夜の廊^{らう}に船くる海の家すだれにかけぬ花藻のふさを

春くれては花にとぼしき家ながら恋しき人を見ぬ日しもなき

十余人縁にならびぬ春の月八阪の塔ひさしの廂離ると

水を出でて白蓮さきぬ曙のうすら赤地の世界の中に

わが家あくたや芥あくたながるる川下も美しくと見て在ありける君よ

森かげにならぶ赤斑あかふの石獅子の一つ一つに熱あつき頬ほよる日

われひとり見まく欲ほりする貪欲を憎まず今日も君おはしけり

さくら貝遠つ島辺の花ひとつ得つと夕ゆふべの磯おもひゆく思

みだれ髪君を失くすと美しくしき火焰燃えたる夢の朝かな
 かきつばた扇つかへる手のしろき人に夕の歌かかせまし

朝戸出あさとでや離宮まねびし家主いへぬしと隣り住むなる春がすみかな

富士の山浜名の海の葦原あしはらの夜明の水はむらさきにして

水こえて薄月させる花畑にあやめ剪きるなり戸出でし人は

責めますな心にやすきひと時のあらば思はむ法の母上のり

載せてくる玉うつくしき声あると夏の日すみぬわれ水みづしも下に

山かけを出しや五人がむらさきの日傘あけたる船のうへかな

春の夜の夢のみたまとわが魂たまと逢ふ家らしき野のひとつ家

傘ふかうさして君ゆくをちかたはうすむらさきにつつじ花さく

わが知らぬ花も咲かむと雑草に春雨まてる隠あんじゃ者ぶりかな

大机ちようやう重ちゆうやう陽やうすぎの父の日をしら菊さして歌かきて居ぬ

円山や毛まうせん氈せんしきてほととぎす待つと侍はべりぬ十四と十五

釣鐘にむら雨ふりぬ黒くろだに谷やぬるでばやしの紅葉のなかに

あづまやの水は闇ゆくおとながらひけば柱にほのしろき藤

御みやしろ社の尾白の馬の今日も猶なほ瘦せず豆食はむ故郷ふるさとを見ぬ

戸に隠れわと啼く声の能う化けし狐と誉めぬ春の夜の家

舞ごろも祇園の君と春の夜や自主権現に絵馬うたす人

くれなるの綾りようはの袴かまの腰こし結ゆひのあたりに歌は書かむと思へ

美しくしき御足のあとに貝よせてやさしき風よ海より来るか

いつの世かまたは相見む知らねどもただごと言ひて別るる君よ

二日ありて百二十里は遠からぬ障子のうちに君を見るかな

蝶のやうにものに口あて御薬みくすりを吸うて来うとも思おぼしはよらじ

春の月ときは木かこむ山門とさくらのつつむ御塔のなかに

遠浅かればに鰈ひつる子のむしろ帆ほを春かぜ吹きぬ上総かづさより来て

塔見えて橋なかばの半はかすむ嵯峨せうじん少人具して鮎なくむ日かな

上かみつ毛けや赤城はふるき牧にして牛馬はなつ春かぜの山

宿乞ひぬ川のあなたは傘さしし雨の後のちなるおぼろ月夜に

三本木千鳥きくとてひそめきてわれ寝いねさせぬ三四人かな

橋の下尺をあまさぬひたひたの出水でみづをわたり上つ毛に入る（以下
六首赤城山に遊びける夏）

石まろぶ音にまじりて深山鳥みやまどり大雨たいうのなかを啼くがわびしさ

裾野雨負へる石かと児をまどひ極ごくあくだう悪道の旅かと思ひ

みづうみに濁流おつる夜の音をおそれて寝ねぬ山の雨かな

大剛だいがうの力者あらびぬ上つ毛の赤城平だひらに雨す暴風あらしす

わが通ひ路棹せをに花ある沙羅しやらも折れ沼ぬじりの家は夕日するかな

くれなるの牡丹おちたる 玉ぎよくばん盤ばんのひびきに覚めぬ胡蝶きささいと皇后

丸木橋おりてゆけなと野がへりの馬に乗る子にもものいひにけり

さざなみにゆふだち雲の山のぼる影して暮れぬみづうみの上

草に寝てひるがほ摘みて牧の子がほとゝぎす聴くみちのくの夏

みじろがず一縷いちるの香ぞ黒髪くろかみのすそはに這はふなれ秋の夜の人

春の山比叡ひえせん先達だつは桐紋きりもんの講社かうじや肩衣かたぎぬしたる伯父おじいかな

君を思ひ昼も夢見ぬ天日てんじつの焰えんのごとき五月さつきの森に

船の灯や水蘆みづあしむらにわかれては海となりたる川口の島

おほするが
大駿河裾野の家に垂氷たるひする冬きにけらし山は真白き

夕舟やわがまろうどの黒髪にうす月さしぬしら蓮の水

とつぎ来ぬかの天上せいとの星斗せいとよりたかだか君を讃さんぜむために

花に寝て夢おほく見るわかうどの君は軍いくさに死いににけるかな（瀬津
少尉の旅順二〇三高地えきの役えきに歿いしけるに）

みづからの若さに酔へる痴しれびと人は羽ある馬に載せて逐おへかし

おん方の妻と名よびてわれまるさくら花ちる春の夜の廊

紫に春日かすがの森は藤かかる杉大木のありあけ月夜

秋の水なかの島なるおん寺の時鐘うちぬ月のぼる時

病む君のまるれと召しぬおん香や絵本ひろぐる中の枕に

うらわかきおんそぎ髪てうぼの世をまどひ朝暮てうぼの経に鶯なくも

初秋や朝顔さける廐うまやにはちさき馬あり驢ろあり牛あり

清滝の水ゆく里は水晶の舟に棹して秋姫の来る

ゆく春の藤の花より雨ふりぬ石に死にたる紅羽べにはの蝶に

秋雨は別れに倚よりしそのかみの柱のごとくなつかしきかな

秋のかぜ今わかかりし画ゑだくみの百日ももかかへらぬ京を吹くらむ（西の京なる岡直道の君の追悼に）

手のわかう仮名しりひける字を笑みぬ死なむと見しは誰たれならなく

に

行水や柿の花ちる井のはたの鹽たらひにしろき児をほめられぬ

波の上を遠山はしる風のたび解けて長くもなびきける髪

ふるさとに金葉集をあづけ来ぬ神社みやに土座どざする乞食かたゑの媪うばに

大馬の黒の背鞍に乗りがほの甥をひに訪とはれぬ野分のわきする家

君見ゆるその時わかぬ幻境の思出ひとつ今日も哀しき

画師の君わが歌よみし京洛の山は黄金の泥でいして描かけな

白牡丹はくさける車のかよひ路に砂金しやごんしかせて暮を待つべき

おん胸の石をすべりし逸矢それやともつくつく日記にきを見る日もありぬ

扇ふたつ胡蝶のさまに夕闇の中をよりきぬ灯のあづま屋に

菜の花の御寺も桃のおん堂も仏うまるる人まうでかな

ひがし山やどのあるじにおどされぬひひなぬすみて来しやとばかり

やはらかき少女をとめが胸の春草に飼はるるわかき駒とこそ思へ

君うれし恋ふと告げたる一瞬に老いてし人をよくみとりける

あらし山雨の戸出でて大きなる舟に人まつただひとりかな

この雨に暮れむとするやひもすがら牡丹のうへを横し斜ななめし

秋かぜは鈴れいの音かな山裾の花野見る家の軒おとづれぬ

春の雨橋をわたらむ朝ならば君は金糸きんしの簀みのして行けな

秋の風きたる十方じふぱう玲瓏れいろうに空と山野と人と水とに

わが哀慕雨とふる日にいとど死ぬ蝉死ぬとしも暦を作れ

川ぞひの芒すすきと葦のうす月夜小桶はこびぬ鮎あしひたすとて

よき朝に君を見たりきよき宵におん手とりしと童わらは泣なすも

まくら二尺さりて水ゆくあづま屋に螢こよなうもてはやす人

舞の手を師のほめたりと紺暖簾こんのれん入りて母見し日もわすれめや

あけがたの鶯ききし空耳の君がまた寝を難じて居たり

わが肩にいとやごとなき髪おちてやがて捲まかれて消し春の夢

君に似しきなりかしこき二心にしんこそ月を生みけめ日をつくりけめ

この恋こひぎみ君うらみたまへどそひぶしの寝物語もさまよきほどに

野ゆく君花に聴かずや語かたりべ部も伝へずありし幾ものがたり

おもはれぬ人のすさびは夜の二時に黒髪すきぬ山ほととぎす

月の夜をさそへど出でずこほろぎを待つと云ふなるとなり人かな

春の月おとうとふたり笛ふいて上ゆく岡を母とながめぬ

きぬぎぬや春の村びとまださめぬ水をわたりし河下の橋

春の朝われ黒髪にたきものす鶯まるれ目ざめし人に

炉にむかひ鼓あぶりてものいふを少女と誉めぬわれいつく母

君が妻はなでしこ挿して月の夜に鮎の籠あむ玉川の里

夕ぐれのさびしき池をわかやかに青葦あをあしふきぬ初夏の風

あつき日の流ながれに姉と髪あらひなでしこさして夕を待ちぬ

岸に立つ袖ふきかへしもみうらの紅あけを点じてゆくや河かぜ

目に青き穂麦の中にももいろのひくき靄もやする花畑かな

おほかたを人とおもはず我だけ猛くなりだけにけらしな忘れし君

くちびると両手に十の細指はわれの領なる花なれば吸ふ

ふるさとを多く夢みぬ兄嫁の美しくしきをば思ふと無きに

彼の天かをあめあくがれ人は雲を見てつれな顔しぬ我に足らじか

帆織る戸へ信おきのたいふ天翁になを荷になひ入る人めづらしや初冬の磯

紅梅に幔まんまく幕まくひかせ見たまひぬ白尾の鷄かけの九つの雛

しら梅や二百六十一ふたたり人は女によわう王わうにいます王祿の庭

花に似し人を載せたる唐船たうせんに大君ふきぬ春の山かぜ

男こそうれしと見ぬれいかがせむあらぬ名着たる大難の日に

舞姫のかたちと誉めよむかしの絵そへ髪たかく結ひたる人を

春の雨障子のをちに河暮れて灯に見る君となりにはけるかな

ほととぎす戸をくる袖の友染に松の月夜のつづく住の江

人妻は高き名えたる黒髪のうちろを見せて戸にかくれけり

京の宿に五人の人の妻さだめ妻も聞く夜の春の雨かな

磯草にまどろむ君の夢が生むさくら貝こそひろひきにつれ

天人の飛行ひぎやう自在にしたまふとひとしきほどのものたのむなり

頬ほに寒き涙つたふに言葉のみ華やぐ人を忘れたまふな

半身にうすくれなるの羅うすもののころもまとひて月見ると言へ

(明治三十九年一月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系25 與謝野寛・與謝野晶子・上田敏・木下杢太郎・吉井勇・小山内薫・長田秀雄・平出修集」筑摩書房
1971（昭和46）年4月5日初版第1刷発行

入力：福岡茂雄

校正：ちはる

2000年11月30日公開

2003年5月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

舞姫

與謝野晶子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>